

博士論文(文学)

## 『三國志演義』成立史の研究

京都府立大学大学院文学研究科博士後期課程・国文学中国文学専攻

井口 千雪

### 【要旨】

『三國志演義』は中国文学史上最も早い時期に誕生した白話小説(当時の口頭語彙を用いた文学)作品である。その成立史を明らかにすることは、大衆の読書という行為がどのように発展してきたのかということを知ることであり、文学史上大きな意義を持つ研究である。しかし、現存する資料が少ないことから、これを解明することは困難な状況にあった。

この小説は現代においても世界各国の言語に翻訳され、多くの読者に親しまれている作品であるが、実のところその成立過程は多くの謎に包まれている。そもそも『三國志演義』の作者は元末明初(明の建国は一三六八年)の戯曲作家、羅貫中とされるが、この人物について詳しい足跡はわかっていない。小説執筆のノウハウもまだ存在しなかったであろう時代に、彼がどのような動機で、どのような手法でこれほど完成度の高い作品を執筆し得たのか。これは文学史上の大きな謎である。本論は現存する明代の『三國志演義』の諸版本や、執筆時に利用されたと思われる史書などの膨大な資料を精査し、その執筆プロセスを浮き彫りにすることによって、『三國志演義』の成立史に関わる諸問題を解明しようとするものである。それだけに留まらず、最終的には大衆の読書という行為がどのように誕生し発展してきたのかという問題にまで考察を深める。

第一章では、現存する『三國志演義』の最も早期の刊本である嘉靖壬午序本(巻頭の庸愚子序には弘治甲寅[七年、一四九四]と記、修髯子序には嘉靖壬午[元年、一五二二]と記。従来は一五二二年が刊行年とされてきた)と葉逢春本(巻頭の元峰子序には嘉靖二十七年[一五四八]と記)の二種の版本、『三國志演義』執筆の際に利用されたと見られる史書である西晋の陳寿著『三國志』(及び裴松之注)・宋の司馬光編『資治通鑑』・宋の朱熹著『資治通鑑綱目』、さらに『三國志演義』の前身になったと推定される元の至治年間(一三二一--一三二三)に建安(現福建省南平市建陽区周辺)の虞氏より刊行された『全相平話三國志』(あらすじは概ね『演義』と一致するが、荒唐無稽な物語を多く含み、文章は甚だ簡略なもの)をまじえ、内容面と文章面から比較を行う。第一に、長く定説となっていた「嘉靖壬午序本が最も羅貫中原本に近い」という考えは誤りであり、実際は葉逢春本の方が古い『三國志演義』の文章をそのまま継承していること、嘉靖壬午序本には文章の改変が施されていることを指摘する。第二に、作者が執ったであろう執筆プロセス、つまり『全相平話三國志』に創作を加えつつ史書で肉付けを施すという執筆手法を具体的に描き出し、原初段階における成立過程についてある程度の見通しを得る。

第二章と第三章では、嘉靖壬午序本と葉逢春本に加えて簡本である劉龍田本を交え、三系統の版本の本文を詳細に比較してその継承関係を考察する。劉龍田本は所謂「簡本系諸本」という系統に分類されるもので、本文が簡略化されている上に本の造りも雑であるが故、従来あまり重要視されてこなかったものである。先行研究では単に葉逢春本系統のテキストを簡略化したようなも

のと考えられて来た。しかし実際に詳細な校勘を行うと、劉龍田本は簡略化以外にも葉逢春本とは多くの異同があり、しかも特に後半においては葉逢春本に一致したり嘉靖壬午本に一致したり、両者の中間段階のような本文を継承しているのである。さらに考察を深めていくと、葉逢春本の文章は非常に稚拙で、原『演義』(各種の版本に分岐する以前に存在したと想定される一つの祖本)に最も近いであろうことがわかる。また、嘉靖壬午序本は劉龍田本よりも文章が洗練されていることが明らかとなる。このことから原『演義』に第一段階の文章的洗練が施された版本が成立し(本論では「簡本系祖本」と称する)、その本文を継承するのが劉龍田本などの簡本系の諸本であり、「簡本系祖本」に第二段階の文章的洗練を施したものが嘉靖壬午序本であると推定される。また葉逢春本から劉龍田本へ、劉龍田本から嘉靖壬午序本へと、人物像がより士大夫的に改変されていることが認められ、これが後に嘉靖壬午序本の系統を汲む毛宗崗本が通行本となって現在に至る要因の一つになったと考えられる。

従来の版本研究は『三國志演義』の一部をとりあげて論じたものが多かったが、本論の研究は全編に及ぶものであり、部位によって異同の多寡や状況が異なることを指摘し、序盤・中盤・終盤の成立時期が異なる可能性が高いことを提言する。中盤、そして終盤にかけて劉龍田本の文章が葉逢春本よりも洗練されたものになっていることは、言い換えれば葉逢春本の時点ではその部分の文章は相当に未熟なものであったということである。このことは、この部分が遅れて成立した可能性を示唆する。段階的成立過程については第五・六・七章でさらに詳しく述べる。

第四章では、前述の継承関係をさらに傍証するものとして、一部の版本にのみ見える「関索説話」(関羽の架空の息子、関索が活躍するエピソード。元は民間で語られていた伝承と見られる)がどのように『三國志演義』に取り込まれ、一部の版本へと継承されていったのかを検証する。従来は周日校本(万曆辛卯[十九年、一五九一]の刊行)に見える関索説話が原型で、劉龍田本をはじめとする簡本系諸本に見える関索説話はそれに増補を施したものとみなす説が有力視されていたが、本論では劉龍田本が原型で、周日校本はそれに削除を加えたものであるという見方を示す。これは第二・三章で導き出した継承関係とも一致する。

第五・六・七章では、『三國志演義』の文章と史書の文章との詳細な比較を行い、どの史書がどこに利用されているのか、また史書の文章をどのようにアレンジしているかなど、作者がどのような手法で『三國志演義』を執筆したのかを考察する。以下に考察結果の要点を箇条書きする。

- (1) 主要人物に関するエピソードには『三國志』(及び裴松之注)が利用され、サブキャラクターに関するエピソードには『資治通鑑綱目』が利用されている。また呉が中心となる部分はその両方を併用して物語が構成されている。それぞれ執筆の手法が異なることから、成立時期も異なる可能性が高い。『全相平話三國志』に『三國志』(及び裴松之注)で肉付け→間を『資治通鑑綱目』に拠る増補→呉の物語を新たに創作し挿入、という流れか。
- (2) 葉逢春本には『資治通鑑』の影響が見られないが、嘉靖壬午序本にはしばしば見られる。葉逢春本から嘉靖壬午序本へ改変される過程で『資治通鑑』に拠る増補が施されたことがわかる。より史実に即した読み物にしようという志向が生まれていたものと考えられる。
- (3) 従来指摘されたことはなかったが、一部には元の趙居信の『蜀漢本末』が利用されている。こ

の書は全国的に普及していた書物とは考え難く、『三國志演義』の成立にはこの書の出版地である建安の書坊が関与した可能性が高い。

- (4) 後半の特に諸葛亮の南蛮征伐の部分、そして最後の蜀・魏・呉の滅亡が描かれた部分は他の部分とは歴史書の利用のされ方が異なっており、作者或いは成立時期が異なる可能性が高い。

以上の議論を受けて結語では、『三國志演義』の段階的な成立過程について一考を試みる。宋元期には民間で講釈師による三国志語りが人気を博していた。そのような状況の中でこれを営利出版と結びつけようとする書坊が登場し、『全相平話三國志』のような読み物を刊行する。これは多くの欠落を含む本文よりも各頁に配された絵図を重視していたと思われ、非識字階層にも受け入れられるものであった。おそらく書坊のねらいは的中し、かなりの需要があったのであろう、識字階層を読者に取り込むと共に、それまで非識字階層であった大衆の識字率の向上も生じ、読者層に広がりを見せた。すると『全相平話三國志』の文章が簡略すぎて文脈を成していない点や、史書とかけ離れた荒唐無稽な記述がある点に読者から不満が生じ、読み物としてより完成度の高いものに作りかえようという要求が生じる。そこで羅貫中が(羅貫中であるかどうか証明する手だては現在のところ無いが)、『全相平話三國志』に『三國志』(及び裴松之注)で肉付けし、創作も交えて最初の『三國志演義』を執筆する。この羅貫中原本は劉備の死のあたりでほぼ終わっていたのではないかと思われる。さらにより充実した内容を目指して、『資治通鑑綱目』でサブキャラクターに関するエピソードを増補したり、呉が中心となる部分が新たに執筆され増補されたり、また劉備死後の孔明の活躍部分(特に南征のくだり)や蜀・魏・呉の滅亡が描かれた最後の部分が段階的に増補される。そうしてほぼ現在と同じような形の原『三國志演義』が成立したのである。ここから、いろいろな読者の要求に応えようと改変を施した版本がそれぞれ派生し、主に三系統に分かれることになる。現存する版本の中で、まず原『三國志演義』をかなり忠実に伝えるのは葉逢春本である(但し脱落したと思われる箇所も散見される[一部は簡略化の可能性もあり])。その本文は文法的に未熟な点が多く、登場人物の形象も荒削りで未完成なところが多い。しかし「古版」に近いということは一つのセールスポイントであり、この系統の版本は万暦年間に至るまで多種刊行されている。一方で原『三國志演義』に読み物としての文章的洗練を施そうという流れが生じ、本書で称するところの「簡本系祖本」が成立する。これ自体は現存していないものの、本書で論じたように劉龍田本などの簡本系諸本はこの本文を継承するものである。さらに、簡本系祖本に第二段階の文章的洗練を施した嘉靖壬午序本や周日校本をはじめとする版本群が生じる(刊行年は周日校本の方が後であるが、本文は周日校本の方が古い様相をとどめていると見られる)。これらは文章面だけでなく人物の形象面でも大きく改変が施されており、結果的に流布本となって現代に至るのはこの系統の版本である毛宗崗本となった。読み物として未熟であった葉逢春本や劉龍田本の系統は淘汰されてしまったのである。

大衆の読書という行為は、口頭文芸のような民間で楽しまれていた大衆文藝を素地とし、それを営利出版と結びつけようとした書坊の介入を経てはじめて発生したのである。そしてそれが世に広まることによって識字率の向上にも繋がり、大衆の読書という行為のレベルを引き上げるという現

象が生じた。文学と社会はこうして共に発展してきたのである。ここに大衆文学を研究する一義がある。